

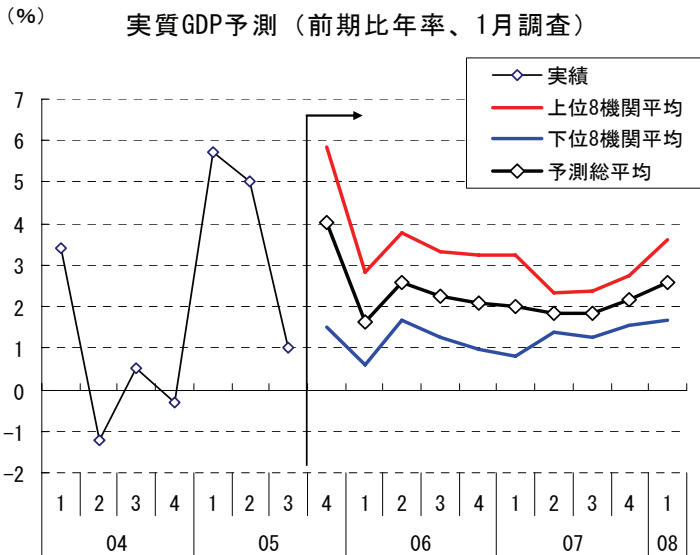
# Economic Indicators

定例経済指標レポート

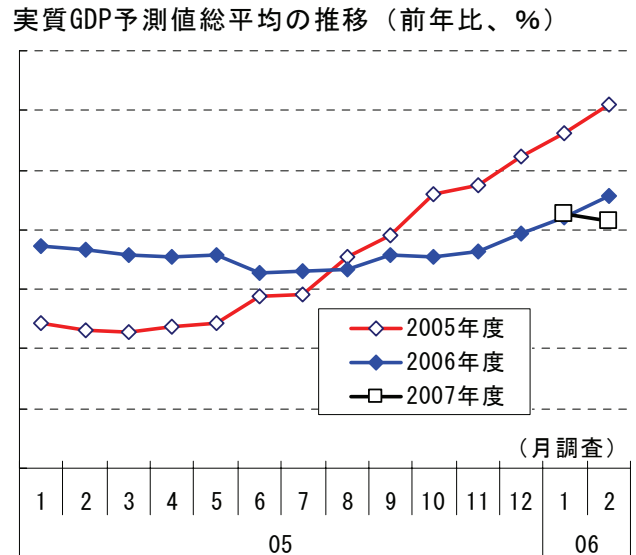
指標名：ESPフォーキャスト調査(2006年2月)  
～2005年度は3%成長の見通し～

発表日：2006年2月10日(金)  
(No. J - 228)

第一生命経済研究所 経済調査部  
担当 新家 義貴(03-5221-4528)



(出所) 経済企画協会「ESPフォーキャスト調査」より作成



## ○ 2005年度は3%成長見通し

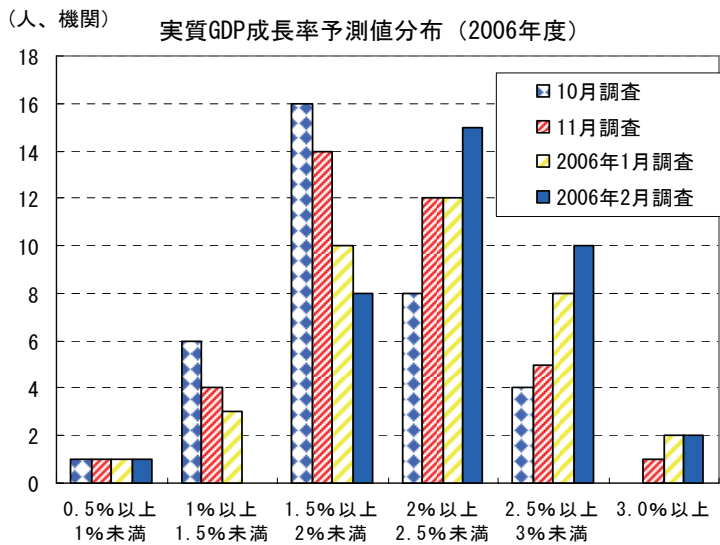
本日、内閣府の外郭団体である経済企画協会から2月のESPフォーキャスト調査が発表された(今回調査の回答期間は1月30日～2月6日)。ESPフォーキャスト調査は、37のエコノミスト・調査機関を対象に毎月実施し、GDP成長率や消費者物価の予測を集計しているものであり、月々のコンセンサスの推移が把握できる。

これによると、2005年度の実質GDP成長率予測は+3.05%(1月+2.81%)に上方修正され、初めて3%台に乗った。36機関中23機関が3%を超える成長を予想している。また、名目GDPも+1.84%(1月+1.63%)と上方修正された。

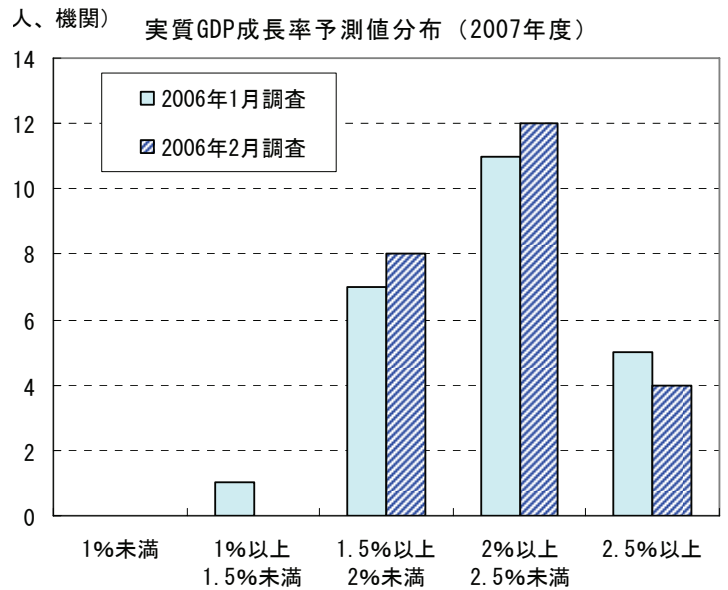
これは、10-12月期に公表された経済指標は予想以上に堅調なものが多かった結果、2005年10-12月期GDP(2月17日公表予定)の成長率見通しが大きく上方修正されたことによるものだ。10-12月期のGDPは、内外需のバランスのとれた形で前期比年率+4.01%(1月同+1.89%)とかなりの高成長が予想されている。また年度の成長率内訳をみても、個人消費が+2.15%→+2.29%、設備投資が+7.62%→+7.86%、輸出が+7.24%→7.56%と、1月調査から2月調査にかけて軒並み上方修正されている。仮に2005年度の3%成長が実現すれば、1996年度と2000年度の+2.8%成長を凌ぐ高成長になる。

2006年度の実質GDP成長率予測も+2.29%(1月+2.11%)と上方修正された。2005年度に比べると伸びが鈍化する予想にはなっているが、これは成長のゲタの要因も大きいため、2006年度に景気が大きく減速すると予想されているわけではない。2006年度に名実逆転が実現すると予想する機関は36機関中2機関に過ぎず、デフレ完全脱却こそまだ見込まれてはいないものの、2006年度も景気回復が続くとの見方が多い。景気拡張期間はいざなぎ景気を超えるとの予想が増えてきている模様である。

また、2007年度については+2.08%と1月調査(+2.13%)から小幅の下方修正になった。24機関中16機関が2%を超える成長を見込んでおり、最も弱気な機関の予測でも+1.5%と小幅な減速予想にとどまっている。2007年度に関しても、安定的な成長を見込む向きが今のところ多いようだ。また、2007年度に関しては、24機関中16機関が名実逆転を見込んでいることも特筆される。



(出所) 経済企画協会「ESPフォーキャスト調査」

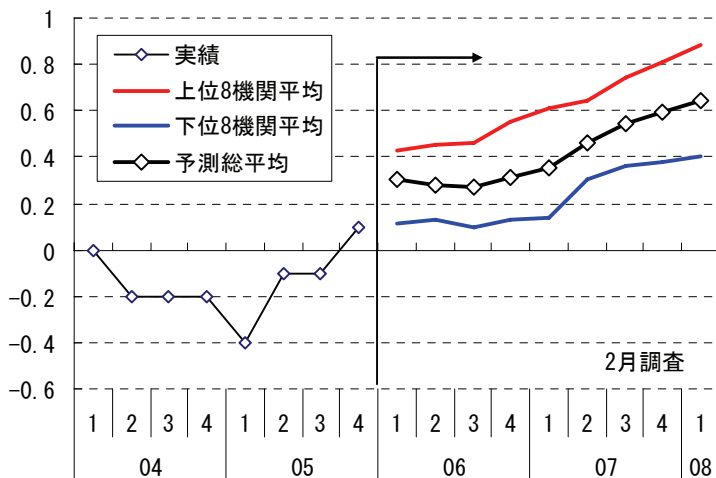


### ○ 消費者物価は1-3月期にプラス幅拡大

消費者物価(コア)の予測については、緩やかな上昇基調が続くとされており、前月からほとんど変化はなかった。なお、日本銀行の福井総裁は昨日の記者会見で「1月分の指数は、これまでの数字に比べよりはっきりとしたプラスになっていくと見込んでいる。」と述べたが、ESPフォーキャストにおいても1-3月期のCPIコアは前年比+0.30%と12月の+0.1%から伸びが高まると見込まれている。

また、低めの予想をしている下位8機関でさえ、先行きCPIがマイナスに転じるとは予想していない点は重要だ。上昇率の想定こそ多少違うが、方向としてCPIの伸び率が徐々に高まっていくという見方はエコノミスト間で共通のものになっているといえるだろう。

(%) 消費者物価(生鮮食品除く総合)予測(前年比)



(出所) 経済企画協会「ESPフォーキャスト調査」